

# 発刊にあたり

中部建築賞協議会会長

梶井 健一



中部圏は昭和41年の7月に、中部圏開発整備法の施行によって誕生をみました。

富山、石川、福井、長野、岐阜、滋賀、静岡、愛知、三重の9県が新しい圏域のグループとしてチームワークを組むことになったのです。

ご承知のように、わが国の広域圏立法には首都圏と近畿圏に整備法があり、この両法は、東京や大阪を中心とした大都市圏についての整備を図ることが目的であります。

一方、この中部圏は面積にして国土の約2割を占める広大な地域であります。前記のような大都市圏の確立とはまったく違ひまして、国土での新しい広域開発圏域を担いとしております。いわば中部の9県が共同して共通の利益となるプロジェクトを推進することによって、地域住民、地域産業の福祉と振興を図ろうとします。

中部建築賞が設定された趣旨も、この中部圏の目的とまったく合致するものがあると考えるのであります。

このたび昭和44年本賞を設定して以来20回になり、これを記念し写真集を発刊いたしましたものです。

今後も皆様方のご支持によって権威ある永続に努める所存であります。

## お祝いのことば



愛知県知事

鈴木 礼治

このたび、中部建築賞が創設20周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

中部建築賞は、中部地方の地域社会の発展に貢献された優秀な建築作品に対してその功績を讃え、さらに優秀な建築物がつくられる基盤を築くことを目的として昭和44年に設定されたものであると存じております。以来、20年にわたりこの中部建築賞がその目的のとおり、優秀な建築作品を生み出す役割を担ってこられましたことに対し、深く敬意を表する次第であります。

近年、県民の都市における居住環境に対するニーズは高度化・多様化してきており、良質な建築物や快適な居住環境についての関心が高まってきていることから、愛知県といたしましても、県の長期計画である「愛知県21世紀計画」において、個性と魅力ある美しい街づくりを主要な課題といたしまして様々な施策を展開しているところであります。

このような時に、中部建築賞20周年記念誌として、これまでの受賞作品集が発刊されますことは、建築関係の業務に携わっておられる方々にとっての良き指針となるものであり、個性と魅力あふれる都市居住環境の形成を図る上で、誠に有意義なことと存じます。

終わりに、この記念すべき20周年を節目として中部建築賞が今後ますます充実し、地域社会の発展に貢献されますことをご期待いたしまして、私のあいさつといたします。

# 魅力ある中部圏の創造に向けて

建設省中部地方建設局長

藤井治芳



中部地方の地域発展に寄与することを目的とした中部建築賞が昭和44年度以来20回目を迎えるにあたり一言ご挨拶申し上げます。

中部地方はわが国のほぼ中央に位置し、日本アルプスに代表される山岳地帯、変化にとんだ海岸線など極めて優れた自然環境と名古屋市をはじめとした、人口集積及び豊田、四日市、浜松等、工業生産機能の高い集積があり、かつ首都圏、近畿圏に比べ豊富で優れた開発余力を有した地域であります。

こうした中でこの地方は、21世紀に向け、多極分散型国土の形成を図っていく上で、首都圏、近畿圏とも異なる新しい大都市圏として、日本全体に貢献することを目指すことが期待されております。

地域づくりにおいては、近年の国民の価値観の多様化、高度化により、地域環境や都市生活との調和に配慮した創意工夫が必要となっております。

簡単に申し上げれば、楽しい町、明るい町、活気のある町、若者の集まる町づくりを進めようということであります。

建築賞は、すでに20年の歴史と実績をもち、多くの優れた作品を世に送り出しております。

この点からも、この建築賞が、中部地方の発展に果たす役割は大きいといえましょう。

一方、本年10月アメリカのサンフランシスコ地震に見ますように、安全も地域づくりを進める上で大きな柱であります。

中部地方においても、1891年10月28日、マグニチュード 8.4の直下型地震が濃尾平野を襲っており、もうすぐ 100年目を迎えます。

“災害は忘れた頃にやってくる”ことを我々技術者が肝に銘ずることはもちろんですが、一般の方々にも、機会ある毎に、注意を喚起していくことが必要だと感じております。

最後に、この建築賞に示される建築技術の蓄積が今日の建築ブームの中でまちづくりにいかに発揮され、より住民に愛される建築物構築と魅力ある中部圏の創造へとつながることを確信いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

# お祝いのことば



愛知県商工会議所連合会

会長 竹田 弘太郎

中部建築賞が20年を迎え、これを記念した作品集が発刊される運びとなりましたことを、先ずもって心からお祝い申し上げます。

優秀な建築作品、とりわけ中部地域において地域社会の発展に貢献したと認められる作品を顕彰することを大きな特色とするこの賞が、建築、設計の分野において高い評価を得るようになって参りましたことは、この間における関係者のご努力、ご尽力の賜でございまして深く敬意を表するものでございます。

さて、都市の主役はいうまでもなくそこに住まい、働き、憩う“人”であり、そして、その活動のステージを演出するのが建築物であります。

当地名古屋では、本年、市制 100年を記念した世界デザイン博覧会が開かれ、1,500万人を越す入場者を見、盛況裡に幕を閉じましたが、この博覧会に併せ、名古屋における道路、公園、サイン類などの景観整備が進み、この期間に、名古屋を訪れた多くの方々に名古屋の街が美しくなった、との印象を与えたことは、また大きな成果であったと存じます。

これを契機に、21世紀に向け国際都市名古屋に相応しい風格と個性ある街づくりが進むことを強く望むものでございます。

人々のニーズの多様化、高度化に対応し、建築物にも機能性や先進性に加えて、デザイン的にも優れたものが求められるようになり、さらには歴史、文化、風土を具現化する中で、その地域のアイデンティティを主張する社会ストックとして認識されるまでになって参りました。

優秀な建築物は、その意味からも単に所有者のみにとどまらず、地域の特色や魅力づくりにも貢献する、まさに街の財産として永く継承されるべきものであると存じます。

この賞が、建築、設計に携わる方々の励みとして、さらには地域づくりに、今後ともその役割を果たされますよう念願いたしまして、私のお祝いの言葉といたします。

## 中部建築賞20年のあゆみ

### 出席者

浜口隆一	建築評論家
鬼頭梓	建築家
廣瀬一良	中建築設計事務所
塩野谷格	中部開発センター副会長
柳澤忠	名古屋大学工学部建築学科教授
山梨清松	静岡県建築士会会長

### 司会

執行 實	中部建築賞協議会委員会委員長
------	----------------

### 点火された炎

〈執行〉かねてご案内のとおり、中部建築賞も創設から20年を迎え、大変意義のある年であります。

そこで、20周年記念事業として、記念式典・出版物（受賞作品写真集）を発行したいと思っております。その出版物に、座談会の内容を掲載いたしたいと思ひまして本日諸先生方にご参加いただいたのであります。

それでは最初にこの中部建築賞の創設にいろいろご苦労いただきました廣瀬先生、浜口先生、このお二人からお願いいたします。廣瀬先生のいろんなご本を見ますと、火つけ役が浜口先生だというようなことも聞いておりますので、浜口先生から一言皮切りでお話し願えたらと思います。

〈浜口〉やはり廣瀬先生でないとわからない。私はマッチを投げたかも知れないが、本当に燃え上がったのはそちらだったから。

〈廣瀬〉それでは火つけ役として申しますが、後であのころの浜口先生の心中というか、なぜあんなにこの地域に火をつけられたかということをお聞きしたい。とにかく僕は火をつけられて、慌てふためいてバタバタしただけですから（笑い）。

それでは、簡単に最初口火をきらしていただきますが、とにかく火をつけられたのは昭和41年ぐらい、始まる3年ぐらい前だったと思うんです。僕たちそのころ中堅と言えば中堅ですが、中堅のものを引っ張り出して、新幹線ができ



浜口隆一

たばかりのときです。羽島の駅のほうへご一緒に行ったときにこの話が出ました。とにかく、中部地区で建築作品のコンテストみたいなもので、コンペでもないし、そういうことを始めたらどうだと、ぼやっと言われましたね。会長は初め桑原知事がいいと言っておられた。覚えてみえますか。当時愛知県知事の。



廣瀬一良

〈浜 口〉 そのころ、そうでしたね。

〈廣 瀬〉 えらいことを言い出されたと思ってね。さあ、火をつけられたからなんとか動かさなければいかんだろうと。ちょうどこのころ名古屋で、例えば疑似コンペの問題だとか、それから名古屋市とか県へ、要するに自治体の代表的な建物はコンペにしてほしいとか、ちょうど名古屋の設計界は、そういう意識に目覚めたころだと思うんです。

それで僕と、それから今、健康を害していますが、五十嵐君と後から久米の吉田さんも加ってぼつぼつやりだしたわけです。親玉は知事というと、ほかの県と絡んでくるし、具合の悪いことが起こりゃせんかという。そういう懸念があって、中部開発センターを担ぐ話が出ました。そのとき名古屋鉄道の土川さん（故人）ですか、土川さんが塩野谷さんのところの親玉だったわけですね。それで今、亡くなられた当時愛知建築士会会長をしておられた水野さんに案内していただいて、土川さんに会いに行ったわけです。ちょうど名古屋まつりのときでした。それでお会いしたら非常に快く受けていただいた。それから塩野谷さんのところへ。

〈執 行〉 私の聞いたところでは、最初は東海3県で始まったと聞いています



が、その頃から中部圏になったのでしょうか？

〈塩野谷〉 3県の合併という話はちょっとありましたね。それは中部圏とは別でお流れになりました。

〈廣瀬〉 だから当然その次に出てくるのは中部開発センターです。それから塩野谷さんのお付き合いが始まって、お会いしたらこれは渋い方だが引き受けてもらえるだろうかと（笑い）。そうしたら、こちらもどうにかやってやろうということになって始まったわけです。

これが初めて、何度も発起人会の発起人会というのを繰り返しまして、この協議会の会則の基をつくり上げたりしたものです。

それから浜口先生、そのころの先生の気持ちとかをうかがいたいんです。中部をひっかき回してやろうという、そう受け取ったんですよ僕は（笑い）。

〈浜口〉 その前からだったけど、私は東京を中心にしたピラミッド型の日本、そういうものがどうも嫌いでした。結局その気持ちが高じて今日、掛川に住むことになっている（笑い）。そういう地域主義というか、地域の連邦のような日本というかね、そういうものが性に合う。これはかつての戦争が反面教師として影響したのでしょうかね。

以前、北海道に行ったときも、戦争直後のせいもあって、「北海道独立論」なんていうのがあって、私もびっくりしました。要するに連邦的な考え方というのが戦後日本の方々に芽生えていたんじゃないですかね。そういう考え方がいわば、リーディングコンセプト指導理念として続いてきたんだと思います。

〈廣瀬〉 ただ、僕たちまだ日本の中での名古屋という位置づけに対する目覚めがなかったわけだ。トロンとしてたもんだから。

〈浜口〉 そんなことはなかったけれど、当時の名古屋の方には東京を怖がる気持ちといったものが、私にはちょっと意外なほど、ありましたね。

そのころ私は、東京にいたわけで、東京の人間の利点を逆手に利用していたと思いますから、あんまりえらそうなことは言えないけど、とにかく私の気持ちとしては、そういう地域の方がそれぞれ自分の主体性でやるべきじゃないか。やらないのはおかしいじゃないかといったことをしゃべった覚えはあります。そして、そういう話をしたら廣瀬さんを始めそれは当然そうだという考えの方がいっぱいいて、僕もびっくりするほど火が燃え上がったんですね。

〈廣瀬〉 そうですね。火つけ役みたいな感じで、ほかのいろんなこともばあーっと出てきたような感じですね。清家さんや池辺さんに来ていただいて話を伺ったり、当時はやったモジュールにのめり込んだり。

〈浜口〉 だからマッチ1本でガソリンが、……といった案配で既にそのときに、燃料はあったと思います。

〈廣瀬〉 いや、マッチポンプとは思わなかったがとにかくびっくりしたから

(笑い)。

〈浜 口〉 私が、エネルギーとして頑張ったというふうなことは、正直何もありません。タイミングのいいときにマッチ1本でというのが……本当のところ  
です。

## 建築文化を育む

〈執 行〉 柳澤先生も創設当時、5回、6回と審査をやっていただいて、また最近も2回ばかり続けておやりになっていますが、そんなことで創設当時の賞の在り方、私も先程廣瀬先生がおっしゃったように、何かこの地域の建築文化の芽は出てこないのかというようなことが、この中部建築賞の創設が切実だったというようなことを地元の建築家の方々が、やはり浜口先生の投げかけたマッチの発端だというようなことをお聞きしたんですが、その辺のことで何かお話どうでしょうか。



柳澤 忠

〈柳 澤〉 私は創設には全然関係しておりません。私が東京から名古屋へ来たのは昭和39年で、スタートが39年と伺ってなる程と思ったんです。この年は新幹線が出来まして、オリンピックの工事を始めた青山から私は来たもんですから、随分雰囲気が違う感じがしたわけです。

その後、水野金市先生が誘ってくださったのか、若手の審査員を入れるということで30そこそこだったと思いますが参加させていただきました。

私がまいりましたとき、名古屋大学はどろんどろんで、全国のキャンパス紹介を週刊朝日がちょうど特集を連載しておりましたときに、名古屋大学というのは“泥沼の大学”とかなんとかいう本当に長靴を履かないと雨の後は校内を歩けないくらい(笑い)。その中にさん然と豊田講堂があったわけなんで、豊田講堂はほとんど最初か・2回目かというぐらいに中部建築賞を受けているんですね。

ただ、残念だけど名古屋の方が設計したわけじゃないという感じはしていましたし、その後南山大学だとか、県立芸大とか、なかなか名古屋市周辺はいいキャンパスができるんですけど、そういうものもなかなか地元でないというのが残念でした。

私も名古屋に来たてのところに、お役所とお付き合いをしますと、大体都市計画的な委託研究、例えば市町村で基本計画をおつくりになるのが、東大のそれこそ都市工のなんとか先生というふうなことで、数年後にだんだんにそうでなくなってきたと思いますけど、今は少し、そういう東京の力を借りな過ぎるというような感じに若干はしております。

塩野谷先生なんか気を配っていろいろバランスを取っていらっしゃると思いますけど、私が名古屋へ来たては、なんとか役所が学者の協力を得るときなん



かには、名古屋でやれるようにしなくちゃならんというふうに思いました。そういうことで中部建築賞の委員を名古屋に来たてにさせていただいたのは大変うれしかった。本当にあっちこっち回って歩いたと思います。去年おとしやらせていただいたところは若干簡素化しているような感じがしますが（笑）。随分複数の委員で丹念に見に行き、後で議論をしているというようなことだったと思います。

ただ、9県とさっきお話がございましたが、9県というのもわれわれの生活圏として実感がわきません。静岡県が入る中部4県でさえ、なかなかびんところないところもございますけど、9県という地域がどういうものなのかなという、それがどうして中部建築賞の範囲になったのかなあというあたりは、ぜひお話を伺いたいところです。

当時、水野先生なんかその9県のバランスというか、全然入らない県があっただけかという気遣いを随分していらっやして、私など来たての若手のころには若干抵抗がございました。日本の中でどういう範囲なのかなという、若干気になっておりましたけど。

## 中部圏とは

〈執行〉 私が前委員の吉田さんの原稿を見ますと、41年当時は東海4県を対象にした優秀な建築物を、というような発想があったらしいです。それで地元の方がだんだん考えていって、建築主、建築家、施工者の三位一体の賞にしようという話とともに、会長さんを先程おっしゃった県知事にするかというようなことで、ちょうどそのころ、中部開発センターというものが出発したところで、どうも中部圏というような話になってきたような感じに受け取っているんですが、私の資料によりますと、塩野谷先生は審査のほうも長く、前半の終わりぐらいからずっと引き続きお願いいたしまして、17年の長きにわたっているわけですが、また現在は中部開発センターの副会長でありますので、いろいろご存じでございますので、その辺でお話を。

〈塩野谷〉 中部圏ができたときの話をすると一晩ぐらい時間がかかりますけどね（笑）。とにかく最初に首都圏がつくられ、それから近畿圏ができたんですよ。その中間にある地域が中部圏になったということがいえるんじゃないかと思うんですね。

その場合、中部圏というものは、広域的に地域の開発整備を進めようということで作られたものですから、従来の中部地方とは違うんです。昔の僕らの小学校ぐらいの地理の教科書には新潟県が中部地方に入っているんです。今は東北に入っておりますがね。このように地理的な意味における中部地方と中部圏とは違うということがいえるんです。僕も新潟県には、数度行っていますが、



塩野谷 格

ここは昔から東北という意識があるんですね。中部地方の一員になっていましたけれども、どうも地理的な範囲に入ってくることに自身に昔から抵抗があったらしいですね。ですから中部圏に入りませんかといったときに、いや、東北が出来るのであれば、そっちへ入りたいから遠慮しますわということになったんですよ。

ただ、福井県と滋賀県と三重県は近畿圏とだぶっております。近畿圏でもあり、中部圏なんですね。先に近畿圏ができたときに持っていかれちゃったということが一ついえますけども、それ以外に、歴史的に東海3県とか、そういう関係も深いし、ぜひ三重県もこっちへ入ってくださいと、そうしたら滋賀県も、私のところも安土城じゃないけど、信長がつくったところで中部と関係があるんです（笑い）という話で、こっちにも入りたいということになりました。それから福井県ですがここは名古屋通産局の範囲ではなく、大阪通産局に入ります。ところが、それ以外は、大体、名古屋におかれている省庁の出先の管轄下にあるのです。そういうことですから、やりにくいからぜひこっちへ入りたいたいということで、ダブって入ったのです。まあ、それも融通性があっていいじゃないかというようなことになったわけです。

そしてね。この中部圏というのを、自分の生活の郷里とか、ふるさととか、そういうものとの関係でみますと、例えば金澤の人が、「私の出身は中部です」とは絶対いわない。それから滋賀県の人でも、中部圏へ入られたけれども、出身地が大津だとすれば、中部の出身ですと東京へ行っても言わないですよ（笑い）。それでわかりになるように、中部圏というのは国土整備を行う土俵だということですからその辺は、ぴったりしないわけですね。

## 地域主義と作品主義

〈執行〉 先程ちょっと柳澤先生がおっしゃいましたが、創設当時は地域により建築作品のレベル差があり、審査の段階で若干の配慮がされたというようなことをちょっと聞いていますが、最近ではもう全くそういう配慮はしないんですね。これはかなり長い期間の間に変わってきたんでしょうかね。

〈廣瀬〉 それは始めのころも、随分議論されたです。作品主義か、地域主義か。僕たちは作品主義の立場を取りたい。けれども、もめちゃってね。例えば北陸が離れちゃったら、これはまた意味が半分なくなっちゃう。随分最初のころはもめましてね。やはり施主がこの建物はいい建物だということを認識しなければ何もならない。建築家だけがいいと言っていたってしょうがない。だから設計した人、工事をした人、施主、そういう人が表彰されなければいけないという結論になったわけです。

それともう一つ中部地域の建築家の交流という、あるいは建築に携わる者の

交流を促進しようという別の意味があったんです。それ迄は北陸と完全にしゃ断されていますからね。それで付き合いがなかった。この協議会ができてなんとか付き合えるようになってね。この二つが信念になってつけられた火がだんだん燃え上がってきた。

〈執行〉 それは北陸の各団体の役員の方にお話を聞きますね。今までは学会とかJIAとか、団体だけの東海北陸ブロックの会合はあるが、いろんな団体の役員間で、やっぱりこの中部建築賞に関しては一つになれるときに1年に1回あるというのはいいことだという、そういうのをお聞きしたことがありますね。

〈柳澤〉 私はレベルが低いという感じよりも、応募の数だとか、それから資料をつくる熱意とか、それがとても違うんですね。ですからつい、受賞確率が非常に愛知県が低くなるのが気になっていたのです。要するにたくさんのお応募の中からバランスを取るとこのぐらいにしておこうという感じが若干あるものですから、それに対する抵抗があったのであって、北陸のレベルがどうのこうのという、そんな感じを受けたことはないですね。

それぞれ建物ごとに、やっぱりその場所でなくちゃいけないわけですから、そう簡単に建築のレベルというのは論じられませんか、その土地に合ったデザインということになったと思います。さっきの廣瀬先生のおっしゃる交流というのは非常に感じますね。

建築学会でも、この数年は各支部の交流とか、ということをもっとやろうという話が出てきておまして、九州支部と中国支部というのは1年おきに支部の研究発表会を合同でやっているんです。それで近畿と東海で一緒にとときどきやろうという相談はしておりますし、それから北陸と東海も、ただ北陸、東海、近畿となると案外話がまとまらなかったりするんです（笑い）。

〈廣瀬〉 そうでしょうね。今はどうか知らないですけどね。最初富山県が非常に熱心でしてね。それで北陸を引っ張られて非常に具合がよかったんですけど、今はどうですか。

〈執行〉 今は富山県は独自に、県内で予選をやりまして選出されたものが応募されるということです。

〈廣瀬〉 それはね、しばらくたったら、そういう傾向になりましたよ。初め協議会をつくるとき富山県は熱心だったです。

〈執行〉 応募は少ないですが、レベルの高いもの、よりすぐれたものが出てきます。

〈柳澤〉 ですから資料がそろっているんです。これは富山県だというのが一目でわかるわけです。

## 生活と密着した建築

〈執行〉 まだお話をお聞きしていない両先生、後半にわたっての、いろんなお話どうでしょう。鬼頭先生何か。

〈鬼頭〉 私は全くよそ者でございます（笑い）。よそ者なんです、私の父の出は愛知県なんです。鬼頭というのは大体愛知県じゃないですか。こっちへ来ると鬼頭というのがたくさんいるんでびっくりしました。ですがそれは私の先祖の話で、私自身は東京で生まれて、東京で育っていますから、全くよそ者でこの賞について何も知りませんでした。

ですがかねて、私は3者が表彰されるというのは非常に意味が深いことだと思っていました。この審査員を引き受ける前から大変にそのことには興味を持っていたんです。

ただ、先程からお話を伺っていて、例えば浜口さんの言われた連邦意識みたいなものとか、あるいは地方の、中部圏のというようなお話は、実際に建築を見ますとあまりそういう感じを受けないのです。これは中部圏に限らず、日本中今どこへ行っても大体同じになってきてしまっていて、そういうときに中部圏としての中部建築賞というのはどういうふうになっているのか、ちょっと私にはよくまだつかめないといいますが、よくわからないところがあるんです。

生活とか文化というのは、相当東京と地方で現実に違うと思うんですね。違う面が随分まだあると思うんですけど、建築になるとどうもその違いが減っているような気がしますが、どうでしょうか。何か建築というのにはもう一つ別の力が働いていて、割合強権をもって何か全部同じものを、材料は同じ材料がざっと日本中総なめにしてしまうとか、そういうようなことが一方であって、建築というのはなかなか……。本来は建築というのは非常に生活と密着したものであるはずなんですけれども、必ずしも今そうならないような気がする。そんな感じを今持っているんです。あまり直接中部建築賞の話にならないんですけれども。

〈柳澤〉 主として洋服だと思えますけど、外国の流行なんかは大阪が真っ先に取り入れる。それから名古屋で普及するんです。一色に染まる。東京では各自で流行を自分に合わせるという傾向がある。名古屋というのは、やっぱりそういう意味では建築はどうでしょうかね。若干白い建物がどんどん流行したり、何かそういうところはないでしょうか。

〈廣瀬〉 どうでしょうかね。今の40代の人、40代初めの人ぐらいからは相当変わると思うんですよ。50代以上の方は、なんと言ったらいいか、私も含めてもう一つボルテージの下がったところで仕事をやっているような気がするんです。いけないことですが、しかし小品では相当鋭いのが出始めています。



鬼頭 梓



## 中部建築賞の使命

〈鬼 頭〉 多少話がずれるかも知れないですけど、アルミサッシというのが日本中を風びしていますでしょう。サッシになると縁側がなくなっちゃうんですね。縁側につけられるサッシというのはないんです。サッシが縁側をなくしてしまう、大変暴力的にそういうことが日本中席卷しているような感じがするんです。中部とは特に関係ないかも知れないですが。

〈柳 澤〉 それは名古屋辺りでは、まだそんなに痛みを感じませんが、長野県なんか、本当に残酷な感じがしますね。大きな合掌屋根の家に妙な増築をするというふうで、もうちょっとその地方の建築というのを別の形で育てるようにしていかないといけないという感じがしますね。

〈廣 瀬〉 猛烈に痛みを感じたことがあります。沖縄へ行ったとき。そこにアルミのサッシが、あの赤瓦の伝統的な住まいにはまっているのを見たら、あれは本当に暴力という感じがしますね。全くそれは同感ですね。

〈鬼 頭〉 そういうときにこの中部建築賞というのが、何を掘り出すことができるのかというのが、大変大きな使命であるような気がするんですけど、なかなかいいものには遭遇できないという感じがありますけれどもね。

〈執 行〉 山梨先生はどうでしょうか。

〈山 梨〉 私どもの県からは、針谷先生がずっと熱心に審査員をやっておられたんですが、最初からですか。

〈執 行〉 山梨先生も審査員をお願いしてもう8年です。

〈山 梨〉 針谷先生が病気になられたので、それであとだれかということになって、若手でもいいんですが、審査員になると応募できないんですよ。結局、針谷先生に言われちゃって、私も2回ばかり入賞しているもので、若い連中で

は無理だろうからやってくれないかということで、それでやるようになったんです。

ただ、静岡県の場合は、どうも名古屋より東京指向なんですね。いろんなつながりが東京の方が多いということです。先程中部圏という話が出ておりますが、そういう枠の中で考えていくと、中部建築賞かなということです。たまたま関東ではそういう賞がないし、浜口先生や名古屋在住の諸先生方が、理想を持って真摯に最初から頑張ってくられそこに入っているということかと思えます。

幸にして静岡県は、人口も全国で10番目、工業出荷額でもなんでも大体10番目で大きな県ですから建築も割合にありますし、良い作品も数があるわけです。そういう点では応募するものもあるということで、今までかなり入賞・入選してもらってきているわけです。数から言うと、こんなに選ばれているじゃないかということですが、実態としては東京の方々が設計や施工するということが多く、入賞・入選もそこへ行くことが多いわけです。

今から5年前に静岡県建設業協会で、建設業協会賞（土木部門と建築部門）というのを設けたんです。これは地元の人たちが主で、中部建築賞もほとんどもらえないという、そういう反ばつからきているんです。しかも賦課金は納めなくてもいいし（笑い）ということで、今年が6年目です。私、その審査を最初からやらされています。土木関係は元建設省の課長だった、三谷さんという人が委員長で、私は建築の方ですから副をやっているんです。あと建設省の工事事務所長さんとか、県の技監さんとか、そういう人たちが入って審査をやっているんです。これはこれなりにだんだんと評価をされてきている。

ただ、幸にして中部建築賞では住宅分野でも私どもの県が結構入っていますので、それには地元の建設会社も入っているんですね。施工面では。そういう点ではいづらか継がっていると思いますが今後どういうふうに考えていったらいいかなというのが一つの宿題ではあるわけです。

それから私、昭和57年度から審査員をやらしてもらって、最初わからなかったので現地審査は私の県内の審査を他の人と一緒にしていたんです。応募作品が上がってきて、見ていると県内の設計事務所がかなりあったりして、それがどうも本人たちはそのうち入賞が入選になるんだろうなと思ってやっていると思うんですね。

それがなかなかならないと、そういう関係で私自身もなんとなく、自分の県内を回るのはどうも問題ということで、それで昭和59年にできたら他県のほうを回らしてもらえるようにしてもらえるとありがたいと申し上げ、皆さんの賛成を得て、現在では他県もそのようになって来ました。これは協議会にとってはお金のかかることかも知れませんが、自分の県だと交通費もそうかかりませ



山梨清松

んし、時間もとりやすいし、しかし20年目でもありますのでこのことはいいことか悪いことが、よく反省して、改めなくちゃならないようだったら更に改めなければならない。

ただ、私は気がらくですが、一方では地元ができるだけ入賞・入選してほしいなあ、そういう気持ちからなんともいえない気持ちの場合もあります。本会の目的の地域社会の発展に寄与するということも考えなくてははいけませんし、広い視野から見ていきたいと思います。

## 難しい住宅の審査

〈執行〉 住宅部門は最初の時期はなかったわけですね。

〈廣瀬〉 ありませんでした。住宅部門を造ったらと言い出したのは確か久米事務所の吉田さんではなかったかと思います。

〈執行〉 途中第8回から一般部門から住宅部門というのが分離されたわけですが、途中でいろいろの形で制限を加えたり、してきたわけですが、住宅部門はどう在るべきかというようなことと、住宅部門は応募料も当初は5,000円から始まって、8,000円、1万5,000円となり今は5,000円に下げたわけです。

下げました年は、応募が増えましたが、それ以後は増えないので住宅部門の在り方というのはどうあるべきか、諸先生のご意見をお聞かせ下さい。応募の傾向としては大邸宅が多いので、入賞・入選も大邸宅の入る率が多いということで、この辺も今後の問題となりますが、どうでしょう今までの長い流れのなかから。塩野谷先生どうでしょうか。

〈塩野谷〉 いろいろと工夫しながら前進してきたといえるのではないかなと思うんです。僕も住宅を賞の対象に入れることに賛成でした。結果は大きな家が出てきたりするものだから、今後は面積を制限して、これ以内でないといけないということをやったりしましたけど、どうですかね。応募する人も遠慮もあるんじゃないですか。個人の住宅ですから、賞を取ったは取ったでひがまれるような気もあり、出てくる数がどうしても少ないという感じがしますね。

それからもう一つは、個人ですと思いきった家ができないんです。公共団体でつくられるようなものとは違って、大体、型も同じだということから、あまり新しい様式のもの生まれてこないのです。しかし、それはそれなりに面白いのがこれまでも幾つかあったように思います。今後も続けられるといいと思うんです。ただ全体としてみると、どうも日本の建築物のつくり方は、立体空間の処理が都市づくりといった面でうまくない。そこに問題が多いと思います。

〈柳澤〉 住宅部門としては、戸建ての木造住宅をずっと連続させて、ピレツツジみたいな集合化したものがあるって、そういうのをこそ大事にすべきじゃないかと思いましたね。



〈鬼 頭〉 ありましたね。去年、1 昨年か。

〈執 行〉 立山のふもとに位置する公営住宅ですね。

〈塩野谷〉 僕も見に行きましたけど、何か住宅というものの見方は一般の建築物とはちょっと違った目で見なきゃしょうがないなと思うんですけどね。かなり難しいところではありますね。

〈廣 瀬〉 それとね。最近の若い40前半までの建築家は、わりと岐阜とか一宮、大垣あたりにも優秀な人がたくさんいるんですよ。住宅建築家ですわね。

そういう傾向は東京のほうはどうか知りませんが、アノニマスというか無名性というのか、何もそんなコンテストへ出す必要はない。あるいは会に所属する必要もない。おれはおれだという傾向が非常に強いんですね。だからそういう人を引っ張り出すことはものすごく難しいと思う。要するに同じ場に乘せるということは、何かいい方法があればこっちが教えてもらいたいぐらいです。醒めているのかな。

〈執 行〉 お願いに行かなければいかんですな。

〈廣 瀬〉 いや、お願いに行っても出してくれないですよ（笑い）。本当、何かそういう人を引き寄せるような方法が考え出せれば非常に効果があると思います。さもなきゃ横ばいですわ。間違いないです。

〈柳 澤〉 日経アーキテクチュア ウイズアウト アーキテクトみたいな思想に近づいていくような。建築家なしの建築を大切にする流れなのかな。

〈廣 瀬〉 そこまでも思いつめてはいないと思いますが。ただ、醒めているというだけです。何もそんなところへ出したり、入ったりする必要ないという。

〈山 梨〉 私は賞をもらったものが新建築とかああいうのに、ほんの1ページの4分の1か2分の1ぐらいにまとめて出るんじゃなしに、住宅の場合、プランとか、そういう図面も入れながら日経アーキテクチュア等の全国誌的な、そういうものに載せてもらえるような機会をつくっていただいたほうが若い連中も、それじゃ出してみようかという人もいるだろうし、そういうことをやってみて、それでもだめならだめでまだ次の手を考えるということにしては。

## 審査結果の公表

〈廣 瀬〉 中部建築賞は地方紙（新聞）に載るんでしょう。

〈執 行〉 一応ジャーナリズムには全部資料はお送りしているんですけどね。写真が掲載される程度ですが。

〈山 梨〉 各県の地方紙には載っていますか。私どもの県は割合でっかく載らせてくれるんです。

〈執 行〉 地方紙で掲載の場合は、愛知ですと愛知の県内作品の掲載です。

〈柳 澤〉 建築ジャーナルで。



〈廣 瀬〉 建築ジャーナルには載せますね。だけどそれだけではいけない。もっと中央の雑誌がびしっと取り上げないと。

〈柳 澤〉 ご存じかも知れないですが、今年から建築学会が作品選集というのをつくりますね。今まで学会というのが研究とか論文に中心があり過ぎたので、建築作品をもっと学会の立場で評価していこうと、年に1冊ですけども、50作品ぐらい、今年は最初だからもう少し増すということのようですけど、見開き2ページに一作品を出す。それも中央だけで選ぶんじゃなくて、各支部ごとに選びまして、それを中央で数の調節をするということになっている。第1回だもんですからどうなるかわかりませんが、一応東海支部では通過作品を決めたんです。

商業雑誌とは違う形で作品を評価して発表していこうということなんです。しかも構造技術とか、設備技術とか、いろんな総合的な評価をしよう、意匠面だけで見てはいけないという。そんなことも議論はしております。これが軌道に乗ると中部建築賞との関係が私には気になる場所です。

〈廣 瀬〉 当然ですね。学会としては。

〈鬼 頭〉 これはどんな賞でも大体そうだと思うんですけども、応募するというスタイルですと、やはりできるだけ目立ちたいとか、人に知られたいとか、応募したがる人と、あまり応募したがる人というのはどうしてもいるんです。ですから大変いい作品でも出てこないというのが必ずあると思うんです。

特にこの中部建築賞というのは圏域が広いですし、難しいですが、本当は拾えるといいと思うんです。非常につつましい言い方で、謙遜して、とてもそんなもんじゃありませんと言っているのに大変いい作品があったり、一生懸命出してくる方はたいしたことないというのが結構あると思うんですけど(笑い)。

〈柳 澤〉 学会賞というのは委員推薦というのがあります。審査員が推薦する。ただこれはあまりうまく機能していないんです。今度の作品選集でもそれはだいぶ議論されたんですけど、消えちゃったんです。だから今、鬼頭先生のおっしゃるような、そういうのは非常に大事なんです。

名古屋市でやっている都市景観賞というのは一般市民、本当に近所の人でも応募できるんです。それでできたら写真を1枚つけてくれというような言い方なんです。写真がついていないと事務局の人が行って写真を写してくるんですけど、本当は自分でやったものをお金をつけて出すというやり方に非常に限界はあるんですね。ただ、事務局がどうやって運営なさるのが一番大変です。

〈廣 瀬〉 あれは人のものも推薦してくるんでしょう。自分がこれいいなと思ったら、人の家で人が設計して、それを市民が見てね、これはいいなと思ったものを推薦してくるものもあるでしょう。景観賞は。

〈柳 澤〉 景観賞はそういう趣旨なんです。

〈執行〉 自薦はないわけですか。

〈柳澤〉 自薦でもいい、どっちでもいい。

〈塩野谷〉 ところが、あの入賞作品のなかにはね、市がつくって市が賞もらっているのもあるのです。あれはおかしい（笑い）。

〈鬼頭〉 神戸のはね、神戸市の建築文化賞というのは市の作品は全部除いています。

〈塩野谷〉 そういうふうにしないとね。

〈柳澤〉 だけど市の人たちは随分気がねして、審査の途中でちょっと市が入り過ぎるからなんとかしてよなんて逆に言われるんですけども（笑い）。だけど別に市だけでやっているわけじゃありませんので、設計事務所が大体は協力していますし、それをうまく運用しているということもありますし、ですからある程度は仕方がない。

〈鬼頭〉 こういう狭い範囲ですと、市民からの直接の推薦もできると思いますが、中部圏になるとちょっとそれは難しいですね。

〈廣瀬〉 どうでしょう。その地域の方を委員に入っていて、特に指名して。

〈執行〉 委員は全部入っています。

〈廣瀬〉 その方が地域を回っていただいて、これはいいという作品があったら出してくれということ頼むとか。そういう手よりないんじゃないかな。

## 財源確保の努力

〈執行〉 私ども委員会としては、応募料は無料としたいのですが、財政的にも最近赤字は解消しましたが、ずっと赤字つづきで応募料も年々上がってきたわけです。最近事務局が頑張ってもらっているため、財源を少しずつ残しているんですけど、実際は18加盟団体の協力分担金で維持しているわけなんです。加盟団体も以前より加盟いただいていない滋賀県につづいて、長野県、三重県と加盟団体が減っている現況であります。

〈廣瀬〉 三重県が抜けたんですか。

〈執行〉 先輩の方には申しわけないんですけど、私どもが関係するようになってから長野県が脱退されまして、三重県も去年から抜けまして、私たちは将来ともこの応募料なしでできればいいなというふうに考えてはおるんですが。

〈柳澤〉 学会の方は応募料はうんと安くして、掲載料は高いです。載るとなったら少し協力してくださいと。

〈山梨〉 三重県が抜けたのはね、私も建築士会長、事務所協会の会長さんにも頼んだり電話したりしたんですが、やはり三重県の設計事務所とか、施工会社とかはずうーと入賞にも入選にも入らないから、それで賦課金ばかり出す

んじゃ（笑い）と。そういう見方が出てくるわけですね、三重県は大県の愛知県に非常に近いですからジョイントでやるとかもう少しうまく持っていけなかったかなと思うんです。

〈執行〉 以前は三重県の地元の設計事務所、施工業者の作品が入っておったのですが、最近はどうも大手ゼネコン設計施工の作品が多いですね。そういう傾向が2・3年続いています。

〈廣瀬〉 それは北陸でもそういう傾向があったから、最初からぼそぼそそういう話は出ていたんです。しかし、三重県が抜けるとちょっと困りますね、長野県は初めから危かったんです。

〈柳澤〉 やはり住宅だけを特別扱いにするんじゃなくて、地域施設というか、小さな集会所であるとか、小さな図書館であるとか、本当に生活に密着した小粒のものなんかをまとめて別扱いという手はないでしょうかね。

〈執行〉 一般の部門を大型と小型に分けるとか。

〈柳澤〉 そうです。そうすると随分変わるんじゃないか。

〈山梨〉 そうですね。若い連中もね。

〈浜口〉 ウェート制みたいなね（笑）。

〈柳澤〉 そうですね。

## 今後の中部建築賞について

〈執行〉 つぎに中部建築賞の今後の在り方についてご意見ご指導をいただきたいと思います。

〈廣瀬〉 記念特別賞みたいなものをつくられたらどうですか。

〈執行〉 私も個人的には中部建築賞グランプリみたいなものをつくるのも考えは持っていたのですが、ちょうど先生におっしゃっていただいたものですから。私ども審査をいつも後ろで見ているわけですが入賞作品のレベルが並んでいる年もあるんですが、たまたま抜きん出た作品と申しますか、先生方の得点が抜群に集中する作品にグランプリをとという考え方もよいではないでしょうか。

〈廣瀬〉 ないときは飛ばせばいいんですよ。

〈執行〉 委員会といたしましても賞を何人、選を何人とお願いしているのですが、賞の最下位と選の最上位はあまり差がない場合もあるわけですが賞と選とに分かれるわけですが、その辺のこともあります。グランプリというものもあってもいいかなと思うんです。

## 地域に生きる

〈浜口〉 二つほどあります。一つはグランプリ案は賛成でぜひ実行なすったらどうですか。もう一つは、それと反対側の性格のものです。もちろん21回に

は間に合わないことだけど、一種のウェート制といったものです。

私、今、小都市というか、7万5,000人の都市掛川に住んでいます。実は市長が卓抜な意見を持っている人で、彼が言うには現在の日本には人口10万から3万までの、市制を敷いているまちの数が448もある。こういう小都市の人々の生活と文化は非常に重大な問題だと言うのです。私も共感するところがあるので、そこに移り住んで、仕事をすることにしました。

そういう小都市に住んでみて、いろいろと考えるところがあるわけですが、ここで特に申し上げたいのは一種の「ウェート制」のような考え方です。建築のことを考えるとして、小都市にはもちろん何十階建てといった大きな規模のものはないわけです。しかし2・3階建てぐらいの病院とか、そういうのでなかなかいいんじゃないかというのはある。だから建築の考え方とくに評価の仕方にウェート制を導入してみたらどうかというわけです。もちろんグランプリのような考え方でも必要で両方ともあるほうがよいと思うんです。ウェートに関係なしに。というたとえばボクシング、やっぱり世界で一番強いのはタイソン。これはヘビーウェート。これはしょうがない。柔道でも無制限になると重いほうが勝つ。それはそれで流しておいて、もう一つウェート制。ボクシングなどのウェート制は重い者は軽いほうへ下りちゃいけない。

〈廣 瀬〉 やっとわかった、そのウェート制というのがね（笑い）。

〈浜 〇〉 ボクシングの考え方と同じでね。

〈執 行〉 先生のおっしゃるのは規模ですか。

〈浜 〇〉 大体建築費ですね。

〈執 行〉 坪単価ですか。総工事費ですか。

〈浜 〇〉 もちろん総工事費。というのはこういうことなんですよ。人間の数とかかわるわけだ。つまり建築総工事費の多いのがそれに関係する人間の数が多いわけですね。今度一方で小さいほうを考えると、要するに総工事費が小さいけど、それに応じて関係者の数が少ないわけ。ということは人間別で割りますと、神経の行きとどいているかどうかについて言えば、ある意味で大きいも小さいも競争できるんです。だけどパッと見て比べてみるとそうもいかない。建築というものには「富の表現」という面があるんです。この面では圧倒的に量がものを言う。それはそれで己むをえないけれども、それで全部いっちゃうと大切なことが逃げてしまう。このごろ、小さくても強いのがあるということを実感しているんです。

また掛川市のことになりましたが、新幹線のこだまの止まる駅から、ほんの歩いて5分のところに住んでいます。その駅前広場にはご存じかどうか、すごいモニュメントがあって、それからグランドホテルというこれもどうしてなかなかいい建築のホテルの前を歩いて自分の家に帰れる。なんとなくレベルが高い

という感じがあります。東京へ行った場合いろんな建物があるけど、個人に対するアメニティーというそういうものは、どうもしっくりしない。結局、東京よりも地方小都市でいい場合もある。

私、東京・青山にだいぶ長く住んで、東京のことはかなり知っているつもりなんです。けども青山も地価がベラボーに、高くなって、まちが様変わりしてアメニティーが悪くなり、参ったという気持ちがしてきました。そんなとき家内が死んだりして、東京じゃなしにという気になって、小さな小都市に来た。

そこで体験できるアメニティーは、ある意味で東京の青山よりもいい。少なくとも割がいいという実感です。なんというかうまく言えないけど、土地の評価の高下には、人口の多さからくる何か圧力みたいなのがありますね。大艦巨砲主義というものに通じそう。それが個々の兵隊なり水兵なりにとっては必ずしも有難くない。

1人当たりの評価と合計の評価との間のギャップ。私も以前は圧倒的に合計の評価でものが決まると思っていたのですがこのごろそれだけでなく1人当たりの評価というのものもあるものと痛感しています。

最初の話に戻りますが、実は20年前中部建築賞、そういうのをおやりになったらと思ったときには、今ほどこうして実感がありませんでした。

〈執行〉 悪くなった。

〈浜 口〉 つまり、どんどん東京が悪くなっていますね。

〈廣 瀬〉 浜口先生は初めて地方に住まれたから、そういう感じを持たれたと違うの（笑う）。

〈浜 口〉 そうかも知れません。しかし私にしてみれば、あえて地方に住もうという精神的ダイナモもあるわけです。それもかなり長い年月にわたる。ようやく何か地域主義とか、地方主義というのが一種のリアルな感じになってきました。

とはいうものの実際に個々の建物を見ると2階建てとか、そういう程度です。ですから、やはりショック性というか、話題性には欠けますね。問題はきめの細かさをどう評価するかですね。

## 複眼で見る時代

〈柳 澤〉 本当に建築の評価の仕方なんですけど、本当にいい評価をできれば、別にウェイト制にしなくたって、目がごまかされないでちゃんと選べるんです。ただ、皆さんが納得する結果を出すのに、かなりいろんな立場の審査員がおられて、それぞれの方がいろんな考え方を持たれて、そのトータルですから、なかなか1人がこういう考え方で選んだというほどクリアな理屈にならないですね。ただ、なんとなくその評価をもう少し多彩にしなくちゃいけない。



執行 實

例えば見ばえは悪いけど、再開発などというのはとても、なかなか事情がわかりませんが、本当にその地区に貢献したと、しかもそれができののに大変な努力があったとか、そういうことをもっともっと評価しなければいけない。

だけど、その辺も結局みんな議論していると、まずいきさつなんかもあったりして（笑い）。なかなか一筋縄ではいかないんです。だからもっとはっきり責任を取る方法は、審査員がおれがこれは選んだと、それはなぜだというぐらいな、鬼頭賞とか、そういうのが中にあるとか。本当はそれで総体として随分いろんな賞が選ばれているというほうがよいかも知れない。

〈浜 〇〉 いずれにしても、やや複眼で見る時代にきているような気がします。そういう時代というか、複眼的な見方をやや強調して、総工費の規模によるウェイト制を各建築に、例えばビルならビルでも 100億円とか、10億円とか、さらにもっと小さなビルとかを分けてゆく。

勿論そんなことに無関係に競争させてもかまわない。それはそれでグランプリ的な意味で認めることにする。しかし、それでおしまいにして、各ジャンルごとにウェイト制を敷いて、それぞれ綿密な評価をする。そういう評価に充分耐えるだけに地元の建築業の人々は育てているんじゃないかと思いますが……。

〈柳 澤〉 やはり応募する方の立場に立ちますと、どういう基準で選考するのか、不信感というか、心配がありますね。やはり努力して、時間もかけて、お金もかけて出しても、多分こんな尺度で評価するだろうということで避けるみたいなのところがあるんです。

ですから講評が書いてあるというのは大変いいことなんで、各審査員が自分の名前を出して講評しているという。それも入選までやる。それはいいことなんですけど、ただ、これは割り当てられた方が1人で書くんですから、トータルとしてなかなかその審査員団がどう評価したかということはわからないんですけど、それでもこれがあるだけで随分ほかのいろんな賞に比べると、責任を取っている。ですから小さい公共的な、地元で非常によろばれているものは何か、探した結果こういうのを選んだとかというようなことが皆さんに伝わってくれば、応募の仕方も随分変わってくるでしょう。

〈浜 〇〉 20年前のときに地域主義は新しいことだった。今、地域主義についてはすったもんだのいろんな経験を積んだから、ここでもう一度また先頭をきって、ウェイト制みたいなものをご研究いただきたいですね。

〈柳 澤〉 住宅だって、えらいお金のかかっている作品がありますし、住宅でなくなっただけいいというかね（笑い）。

〈執 行〉 手元の資料によりますと、入賞・入選作品を部門別にまとめたものによりますと、第1回は商業施設が16作品入っていますね。競艇場が入ってい

るんです。最近では競艇場などは最初にアウトです（笑い）。先生のおっしゃったようにウェート制を敷きますと公共建築物・文教建築物とか、いろんなものにまず分類して、その中に大中小とか、大小とかいうウェート制、これは採点するときに先生方が大変でしょう。

それが公平なんですけれどね。

〈浜 口〉 公平というか。つまり論理的な整合性は出る可能性はありますね。

〈柳 澤〉 委員が分担する手もありますね。階級担当とか。小さいものとか。

〈執 行〉 私は小さいものを見ましょう（笑い）。

〈柳 澤〉 そのこのところをじっくり見て行って、しかも審査評をきちっと書いて責任を取る。

〈鬼 頭〉 できれば複数で見に行きたい。

〈執 行〉 現地審査ですね。

〈鬼 頭〉 写真を見てもわからないですね。現地へ行かないと、大体写真というのはいいところしか写していませんからね。

〈執 行〉 そのプレゼンテーションの良し悪しというか。それが大きいですね。最後は現地審査を見た先生にかかっているわけです。

〈鬼 頭〉 今、学会賞は全員で見にいかれているんでしょうか。

〈柳 澤〉 作品賞はもう本当に大変です。

〈鬼 頭〉 数が少ないから。

〈柳 澤〉 だけど数が少ないということに私なんかは大変な問題があると思っている。要するに作品賞というのは、こういうもんじゃないかという感じがもうみんなに伝わっちゃっていますし、ですから応募が少ない。だから当選も少ない。

応募が4点しか出ていなかったから該当なしにしたとか。全国で4点しか出ないなんて話が、それは特別の年でしようけど、逆に言えば、それだからこそ全員で見に行くことが可能なんです。もっとみんなが通るかも知れないと思って応募したらとても無理な、学会ではお金出せない。比較的応募数の多い業績賞という、あれは全員で見に行かないんです。とてもそんな経費はありませんと。あれは都市計画から著作からいろいろある。

〈塩野谷〉 2段階に分けたらいいんじゃないですか。

〈執 行〉 2段階ぐらい、大小と。

〈塩野谷〉 オーストラリアのある有名な国際建築賞は、鉄鋼メーカーがスポンサーになっていて、鉄材を使っていい建築物をつくったものに賞を出しています。中部建築賞にスポンサーを付けるのは問題がありますが、オーストラリアのその賞は、建築費で頭を押えています。

〈浜 口〉 これはそろそろリアリティーが出てきているというふうに思います





ね。

〈塩野谷〉 巨大なものも全部含めていない。やはり鉄材ということになるといろんなやり方があるでしょうけど、あまりでっかいと鉄材なのかセメントなのかどっちだわからなくなっちゃうからね（笑い）。

〈浜 口〉 建築の場合、大きなお金を出すことのできる施主は、やっぱり大きなものをこなすことで大きな評価を受ける。今まではそれでもよかったけど、今の話の居直った人たちが出てきたというのは、そういうものに対してある自信が出てきたんじゃないですかね。

〈柳 澤〉 私の本籍も南青山でね、息子たちはとてもいい本籍だとよろこんで（笑い）。

〈浜 口〉 そういう格好よさを若干経験して、同時に格好よくなって新聞に出るようになった、マンションの広告、億ションが出るころからえらく見事な形容詞で出るようになった。そうなったときに実は、住みにくくなってきたんですよ。アメニティーがどんどん減っちゃうわけです。

## 欠点の正視を

〈柳 澤〉 さっきの塩野谷先生のお話をこちらが受けると、住宅部門というのを少し性格を変えて、幾ら以下とかいう話にすればいいんですね。

〈執 行〉 やはり住宅部門内もさることながら一般部門中には。

〈柳 澤〉 もし住宅部門でせっかくなつくつのに、急に変わるのがいけなければ三つにする。一般を二つに分ける。それと住宅とで三つになる。

〈塩野谷〉 どうしても建築物には大きいものも要るんです。それは、否定できないことだと思います。大きいものもつくってもらわないと困るわけです。小さなものばかりではね。ですから、両方を含んだという意味でね。



〈鬼 頭〉 確かに浜口先生が言われるとおり、分けますと、自分の出る幕があると思ったださるかもしれません。

〈廣 瀬〉 それは言えます。

〈執 行〉 これは今年からやれるんですよ。審査の先生に、今年に関してはこんなような形で審査をお願いしたいということで、そういうふうの評価を変えればいいわけですから、募集するときには、そういうことを公開はしていませんが、審査する土俵でそういうふうに変えればいいわけですからね。私もきょうせっかくお集まりいただいたものですから、一言ずつでも時間が許せばと思いますが。

〈塩野谷〉 その前に土地代をどうするかということなんですよ。土地代を除いてください。それでないとうエートの付け方がちょっとおかしくなる。

〈執 行〉 外構工事まで入っている。工事費かどうか判らない。

〈浜 口〉 それはそうですね。

〈事務局〉 詳しく書いてあるのは建物が幾らで、付属設備が幾らでと。

〈執 行〉 一般を二つぐらいに分けて、住宅は一つ。

〈浜 口〉 土地代を抜いておかないと、かえって今度はにぎやかな東京なんかでやっている人が不利になるんです。食べもの屋がそうです。東京の土地の高いところの食べもの屋はかならずしもうまくない。なぜかというと土地代のために、全部が高くなるからきめ細かくやっていることができないですね。板前でも。前はできた。今そんなことやっていたら来月の家賃どう払うかわからない。だからどんどん。

〈柳 澤〉 東京のいいところまだありますね。早稲田から三輪まで都電が走っていますね。あの辺なんかへ行くと、名古屋の私どもの住んでいる郊外の住宅地というのは、電器屋と喫茶店ぐらいしかない。早稲田あたりへ行くと本当にお総菜の焼きとり屋さんとか、ポタン屋さんとか、そういうきめの細かさはなかなか新興地にはありません。東京はそういうのがある。

〈浜 口〉 東京は確かにそういうのが、それもかなりピンチだけど、いずれにしても、小さいけどきめの細かいところというのは、日本にかなりあって、それを評価する。自分がそうになったから言うのもおかしいけど、これはもうその声が上がってもいいという気がしますね。

〈執 行〉 塩野谷先生どうですか。パリとかイタリアなどのヨーロッパの各地の旧市街ではいいものを残していますね。どうでしょうか。

〈塩野谷〉 日本の住宅建築で一番困るのは、古い様式で入母屋式のようなものをつくり、いらかをとにかくごてごて並べたのが多いことです。とくにこのごろ農村でね。

〈浜 口〉 今、農村に建つ農家の住宅がちょっとおかしいのがある。あれはお

金がだぶだぶ入らしいけれども（笑い）。

〈柳 澤〉 断然おかしい。

〈塩野谷〉 不愉快でしょうがないです（笑い）。

〈山 梨〉 執行先生。住宅の審査をしていつも思うんだけど、すごくデラックスで大きなのが出てくるでしょう。あの辺をもう少しはっきりうたってやったほうがいいかも知れませんね。あまり豪華過ぎちゃって、そういうのは応募の枠とは違うんだということだね。そうしないと、せっかく応募なさった方には申し訳ないし、これからも一層出てくるんでしょうね。

〈浜 口〉 農村地帯で建っていますね。僕も実物を見て驚く。

〈執 行〉 やはり委員会としては、審査の先生には住宅は小さいものを拾っていただくように、大邸宅が多いということをお願いするんですが、どうしても大邸宅の方がレベルが高いんですね。

〈柳 澤〉 もう一つはね、有名作家の住宅も一つ、やっぱりみんな名前を見るから。さっきのそっぽ向かれない若手の本当に勉強している連中のいい作品を見つけるみたいな努力を。たまにあつたら、それを採りさえすれば随分変わると思っています。証拠を見せないとだめですね。

〈山 梨〉 それと欠点は欠点として講評のときにさりげなく一筆入れておいてやれば、こういう見方をしているんだなど、関係者には非常にプラスになるんじゃないですかね。

〈柳 澤〉 だから豪華なものがなかなか当選しないということは、またすぐわかりますしね。だから豪華なるが故に当選するということはまずあまりないでしょうし。

〈執 行〉 そうですね。聞くところによると大手のゼネコンさんなどは、中部建築賞は今年10個上がってくると、5、6作品に絞りセレクトして応募される傾向だそうです。

## 建築の新しい傾向

〈塩野谷〉 最近面白いのは工場でいいのが出てきていますよ。非常にいいことだと思うんです。工場というのは汚なくても、ものさえつくればいいというような考え方がありましたけど、地域の景観づくりに配慮するようになりましたね。そういうのが多くなってきたということはいいことだと思いますね。

〈執 行〉 そうですね。生産施設がここ2年ぐらいいいものが選ばれております。

〈山 梨〉 それはね、雇用関係と結びついているんですよ。もう昔のような工場じゃ求人しても来てくれないもんで。これは地方では顕著ですよ。情報は行き渡っておりますから。工場はいいものをつくらないと。

〈執行〉 私も昨年のR A K A Mという工場を見ましたがよく出来ていましたね。

〈山 梨〉 あれは、人間的ですね。自由さもあるし、すばらしい設計ですね。

〈塩野谷〉 僕はそういうような感覚がもう少し住宅のなかにあっていいと思うんです。ないんですよ、まだ。昔からの様式で金かけてつくればいいという、そんな発想しかない。何か住宅にもう少し刺激を与えるような方法はないかなと思いますね。

〈柳 澤〉 今の日本の住宅が非常に混乱していると思うんです。これからの日本の住宅を示唆するような提案というのをここで見つけて、大事にするという。そういう構想をぜひ。

〈鬼 頭〉 それこそ出来たらすばらしいですね。

〈山 梨〉 協議会で住宅特集で1冊の冊子をつくって、それを販売するとか、そういう印刷発行というのはやらないですかね。そういう金がないんですか。

〈執行〉 中部建築賞も今では愛知建築士会の建築展というイベントがあるんですが、そこでこの入賞・入選作品を公開していたんです。それが5、6年前から建築士会が展示をしてくれなくなりましたんで、結局ジャーナリズムで発表するだけの機会しかないわけです。だから応募された人は、入賞入選された方の作品を見ていただくという機会がなくなったというのは私も残念に思うんですけど、そういう点でおっしゃったように、それを発行するということはとっても大変なことです。

〈山 梨〉 それについての著作権はこちらで持っていて他で発行してもらって、余分に売ればその幾らかをこちらにもらう。ということで契約していけばいい。

〈鬼 頭〉 なかなか売れないですよ。今、本は大変なようです。なかなか売れない。

〈廣 瀬〉 絶対買うという人が決まれば後はもうけだということは簡単なようだが難しい。

〈鬼 頭〉 特にそういう意味の深い仕事は売れないんですよ。

〈山 梨〉 兵庫県なんか、これは歴史的な建築物ですけど、あれなんか増刷してやろうとしていますね。

〈柳 澤〉 非常に最近そういう似たようなものが増えてまいりましたね。中部建築賞ほどの歴史があるものはなかなかないわけですけど、建設省が去年から公共建築賞というのをやりだしましたね。これも案外きれいな冊子を、どのぐらいの範囲に配るかわかりませんがつくっていますし、さっき申し上げた学会の作品選集が毎年出るようになりますね。ローカルにもさっきの名古屋市の都市景観賞であるとか、県なんかも快適空間賞であるとか、いろんなものが、

それはそれぞれスポンサーがちゃんと付けていますから割ときれいなものがだせませぬ。

そういう中で中部建築賞がこれからどう特色を出して、どういうふうに皆さんから、みんなと同じじゃないかと言われないで意義ある形に持っていくかは、なんにもなくて創設されたころのとは一味違って、これからいろいろ類似のものがある中で、どういう特色を持たせていくかというのをちゃんと議論しないと、いかんじゃないか。そういう議論になんとかもう少し若手の人たちが入ってくれるといいのかも知れませぬ。

## 最 後 に

〈執 行〉 私もお話をお聞きしまして、また委員会の方々にも意見をお聞きして、そういう方向へ進みたいと思います。

この20周年の作品集も今編集のほうでいろいろやっておるんですが、おっしゃったように名古屋市都市景観賞なども、小さい冊子ですがよくできております。あれに負けないような私どもも建築作品集にしようと思うんですが、やっぱり市のものはなかなかきれいな冊子です。毎年こんなふうには写真集で発表できれば一番いいんでしょうけど。時間もございませんので、最後に一言ずつ何かありましたら、廣瀬先生どうでしょうか。

〈廣 瀬〉 僕は特にありませんけども、先程の浜口先生とか、塩野谷先生のウェート制というか、分けて考える。これのうまい方法があれば、これはいい方法だと思えます。小さくて金がかかりかかっていないもので、一般も住宅も含めて出してもらえそうな雰囲気をつくり上げていくということは絶対必要だと思いますね。さもないとどんどん抜けていっちゃうから。

それとなんとか三重県を取り戻すこと出来ないかな。ちょっとでもお金が欠けると痛いでしょう。僕も僕でできる範囲の努力はしますけど。それと長く続けていただいた皆さんのご努力に感謝します。僕は生んでおいて逃げちゃった口ですからね（笑い）。感謝とご苦労さまでしたということです。

〈執 行〉 鬼頭先生どうでしょうか。

〈鬼 頭〉 とにかくどんどんもっと応募していただきたいというのが第一です。できれば何か探し出す手立てがあれば、本当にいい作品を残らず探し出したいという気が非常に強い。

〈執 行〉 浜口先生何か。

〈浜 口〉 同じことの繰返しになりますが、できましたらウェート制について考えていただきたい。もちろんグランプリのような考え方の否定としてじゃなくてね。多分両建てが要ると思います。

〈執 行〉 山梨先生どうでしょうか。

〈山 梨〉 私は外部に向かってはPRと同時に、協賛してくれる団体をできるだけ広げるような、そういう方法を考えていったらどうかと思います。これは先程、塩野谷先生もおっしゃっていたことと同じことなんですが、賦課金を少なくして、もっと建築外の団体もあるだろうし、そのほかの団体もあるだろうし、例えば工場関係だとか、そういう団体もあるだろうし、いろんな面で建築物にかかわっている種類別的な団体などを考えていったらどうでしょうか。

それから内部的には、例えば都市再開発とか、団地だとか、の見方というのは相当視点を変えなくちゃならない。いい建築ばかりじゃなしに、再開発なんかは10年、15年かかっていますからね。最初は立派な設計だったんだが物にしなくちゃならないし、多勢の意見も希望も入れなくてはまとまらない。そういうことでデザインのにも、平均以上だったら、それは努力賞ということも、講評にはっきりうたって賞をやるとか、そういう広い視野が必要じゃないだろうかと、そんなふうに思います。

〈執 行〉 柳澤先生どうでしょうか。

〈柳 澤〉 さっき申し上げたんですけど、小さいのも大事けども、さっき塩野谷先生も工場とおっしゃったし、本当に再開発とか、都市計画とか、そういう大きなものも含めて、要するに何か1点1点、なぜこれが選ばれたかということとちゃんと説明できるような、意味のある特徴を持った作品というものを選ぼうという努力をみんなですということじゃないかなと思っています。

## 大いなる未来へ

〈執 行〉 塩野谷先生最後に。

〈塩野谷〉 皆さんおっしゃったことみな賛成です。やはりこの賞の特徴は三者で受賞されるという、そういう特色は残したほうがいいと思うんですよ。中部建築賞らしいその行き方は続けてほしいなと思いますし、また皆さんおっしゃられたように建物といってもいろいろありますが、立体空間の処理にもう少し人間性みたいなものを十分発揮された作品に賞を差し上げるような、そういう考え方になったらいいと思います。

そうして建築についてそれぞれの関係者がもっと頑張っていただけのような何かそういう刺激になる賞になるといいと思うんです。すでに中部建築賞をいただくつもりで企画段階から始められた作品がこれまでも随分ありましたね。そういうある意味では伝統みたいなものができていると思いますが、それを伸ばしていったといたくといいんじゃないかなと思います。

〈執 行〉 誠に長時間にわたってありがとうございました。ただ今の貴重なご意見は今後中部建築賞の発展のために、いろんな意味で助言として、よりよい中部建築賞にしていきたいと思っています。ありがとうございました。